

ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ジャパン

明治十（一八七七）年六月、一人のアメリカ人が横浜港に降り立った。日本の海にすむ珍しい生物を研究するために来日した動物学者、エドワード・シルヴェスター・モースである。

江戸島でさまざまな生物の研究をしながら、東京大学の動物学教授も務めたモースは、三度にわたり延べ二年半、日本で暮らした。そして、日本での生活の中で、日本の人々の暮らしの様子をメモやスケッチに書き留め、詳細な記録を残している。

今からおよそ四十年前の日本の人々の姿は、モースの目にどのようなように映っていたのだろうか。彼の残した記録を見てみよう。

モースが日本を訪れてまず驚いたのは、家屋の作りだった。どの家にも頑丈な扉や仕切りなどない。家の入口には錠前もかけられていない。店も住まいも「開けっ放し」で、通りからは家の中の様子が丸見えである。自分たちの国とあまりにも違う様子に、モースはひどく驚いた。しかし、日本で暮らし、日本の人々と触れ合う中で、しだいに納得していった。

ある時、モースを乗せた人力車が坂道を登っていると、大量の木材を積んだ大八車を男たちがうんうん言いながら押しているところに出くわした。するとすぐさま引き手はモース

大八車
が荷物を積み
引いて運ぶた
め、二つ付いた
輪が二つ付いた
荷車。

錠前
扉や戸に取
り付けて、開
かないようにす
るための金具。

スに断って人力車を止め、男たちに走り寄って、大八車を押すのを手伝い始めた。モースも急いで加わり、掛け声を合わせ、どうにか坂を登り終えた。男たちは口々に「ありがとう」と言いながら、何度も何度もモースに向かって頭を下げた。

またある時、モースは、滞在先で、コートをクリーニングに出してきてくれるように頼んだ。するとしばらくして、頼んだ女性が戻ってきて、「これがコートのポケットに入っていました」と言って、数枚の小銭をモースに手渡した。別の時に、同じくポケットに入っていたと言って彼女が持って帰ってきたのは、使用済みのサンフランシスコの乗合馬車の切符三枚だった。

モースの出会った日本の人々は皆「あたりまえの心遣い」のできる人たちだった。

モースは、こんな言葉を残している。

「人々が正直である国にいることは実に気持ちがいい。」

◆「ここに置いたままでいいのです」

こんなエピソードもある。モースが広島を旅行していた時のことだ。

ある旅館に滞在していたモースは、何日間か他の地を巡った後、再びこの旅館に戻ってこようと考えた。そこで、それまでの間、余分な現金と金でできた懐中時計を預かっておいてくれないかと旅館の主人に願い出た。主人は快くこれを承知した。

しばらくすると、女性が、漆塗りの盆を一つ持ってモースの部屋にやってきた。

乗合馬車
客を乗せ、決
まった路線を
走る馬車。現在
の路線バスの
ようなもの。

漆塗り
木の器など
に、「うるし」
の木の皮から
とった液を塗
ること。また
は、その器。つ
やがでて、水な
どに強くなる。

「お預かりするものを、このお盆ほんに載のせてください。」
 とその女性が言うので、モースが現金かいちゆうと懐中時計とけいを盆ほんに載のせると、女性はその盆ほんをそっと
 畳たたみの上に置き、そのまま部屋を出ていった。

（どうしたことだろう、そのまま置いていってしまったが……。金庫か何かに保管するの
 ではないのか。）

いくら待っても盆ほんを取りにくる様子がないので、モースは先ほどの女性を呼び、なぜこ
 こに置いたままなのかと尋たずねた。すると女性は、「ここに置いたままでもいいのです」と答たえ
 た。驚おどろいたモースは旅館の主人を呼び、再び同じことを尋たずねた。すると主人もまた、当然
 のことのように、「ここに置いたままでもいいのです」と答たえる。

モースの気持ちは揺ゆれた。

（確かに、これまで私が出会った日本人たちは皆みな、互たがいに気持ちよく暮くらしていくために、
 「きまり」を守り正直に生きていた。しかし、ここは旅館だ。私が留守留守にしている間、旅
 館の人たちだけでなく他の宿泊客しゆくほくきやくも、入ろうと思えばいつでもこの部屋に入ることができ
 る。それでも置いたままで大丈夫だいじょうぶだというのか。私の常識では考えられないが……。）

そんなモースの様子を見て、

「私たちも宿泊客しゆくほくきやくの皆様みなも、この品が自分のものでないことは皆分みなかっています。あなた
 が嫌いやな思いいをされることは絶対にありませんよ。」

主人は笑顔で、そうつけ加えた。

モースの気持ちは定まった。



「分かりました。では、お願いします。」

モースは盆の上に銀貨と紙幣とで八十ドルという当時としては大金の現金と金でできた懐中時計を残し、旅館を後にした。

一週間後。

モースは再び旅館に戻り、同じ部屋に通された。

畳の上の盆には、銀貨と紙幣と懐中時計とが、モースが出かけた時と寸分違わずに置かれていた。

旅館の主人がにっこりと、モースに向かってほほえみかけた。

モースは思い出していた。自分の国のホテルの入口に貼ってある、さまざまな注意書きや禁止事項を。水飲み場では、ひしゃくは鎖で取り付けられている。寒暖計はねじでしっかりと壁に留められている。どのホテルでも、石けんやタオルが盗まれないようにさまざまな手段がとられている……。

「私の国の様子を日本の人たちが見たら、どう思うだろう……。」

◆ ビゲローの手紙

アメリカに戻ったモースは、動物学の研究を続けながら各地で講演し、日本の文化や生活のすばらしさを紹介した。

そんなある日、モースの元に、友人のビゲローから一通の手紙が届いた。ビゲローは熱

八十ドルは、
一円。当時は
は、現在の
二万円に
言われてい
る。

心な日本美術の収集家であり、モースが三度めに日本を訪れた時には、一緒に来日して行動を共にすることも多かった。広島への旅行にも同行している。

ビゲローの手紙には、次のように書かれていた。

「君はいつまで標本いじりばかりしているつもりなんだ。そんなものはどこかへ捨ててしまえ。それよりも大事なものは、かつて君や私が親しみを感じ魅了されたあの日本のすばらしさが、今や消滅しようとしていることだよ。私たちが見た『日本』を、一人でも多くの人に伝えるべきだとは思わないのか。」

モースと同じく日本に心引かれていたビゲローは、自分たちが目にしたことを記録として残すよう、モースに強く迫ったのだ。た。

この手紙を読んで、モースは、日本に滞在していた間に書き留めていたメモやスケッチをまとめ、出版することを決意した。

私たちが今、モースの目に映った当時の日本の人々の生き生きとした姿を知ることができるのは、この一通の手紙のおかげだ。

明治、大正、昭和、そして平成と、時代は移り、モースが初めて日本を訪れてから、およそ百四十年の歳月が流れた。

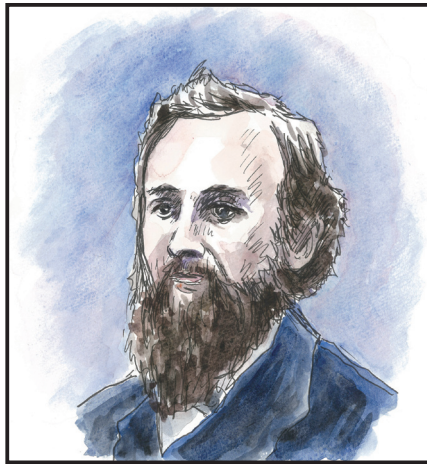


モースが見た日本から百四十年後の今の日本は、モースがこよなく愛した日本の姿をとどめているだろうか。

モースが今の日本を訪れたなら、どのようなメモやスケッチを残すだろう……。

◆ エドワード・シルヴェスター・モース

(一八三八年〜一九二五年)



アメリカの動物学者。来日直後に大森貝塚を発見・調査し、日本で初めて縄文式土器を発掘した。「縄文式土器」の名称は、モースが名づけた「cord marked pottery (縄の模様が付いた土器)」を日本語に訳したものである。二千五百冊の学術書を寄贈して東京帝国大学図書館の基礎をつくるなど、日本の高等教育の向上に尽力した。大正十二(一九二三)年の関東大震災で東京帝国大学図書館が壊滅的な被害を受けたことをアメリカの自宅で知ると、「科学関係の全蔵書を東京帝国大学図書館に寄贈する」と遺言を書きかえた。晩年、日本滞在中に書き記した膨大なメモとスケッチをまとめ、『Japan Day by Day (日本その日その日)』と題して出版。八十七歳で没。没後、蔵書は遺言のとおり寄贈され、現在も「モース文庫」として東京大学附属図書館に収蔵されている。

【参考資料】

- 「日本その日その日」
エドワード・S・モース著
石川欣一訳 講談社
- 「逝きし世の面影」
渡辺京二著 平凡社



◆ 左はモースのスケッチ
モースが江ノ島で海洋生物の調査をしていたときの作業場。
(講談社「日本その日その日」p.107より)